地域の人との暮らしについて伺います。

問 24　あなたが身近な地域で、無くなると困るものやあって欲しいものは何ですか。
自由回答のためそのまま記入。あまり出てこなければ無理して聞かなくても可。
＊スーパーや生協、駅やバス、病院やクリニック、バス無料券、出張所などが想定されます。

○無くなると困るもの	○あって欲しいもの

問 25　あなたが地域の人との暮らしで**大事にしていること**はありますか。
自由回答のためそのまま記入。あまり出てこなければ無理して聞かなくても可。

ここからは区役所保健福祉センター（障害高齢課）に関連した質問です。

あなたが日頃利用する保健福祉サービスについて、伺います。

問 26－1 **あなたはこの１ヶ月の間に保健福祉センターに行くことがありましたか。**あてはまる番号一つに○を記入。（○は一つだけ）ここでいう保健福祉センターとは、問 26－2 にあるような内容の保健事業を実施しているところを言います。予防センターや健康プラザなどのその地域での名称でかまいません。

1. あった→問 26－2 へ　2. なかった→問 27 へ　3. わからない→問 28 へ

問 26－2　問 26－1 で 1. 行くことがあったとこたえた方に質問。**それは主にどのような目的で利用しましたか。**あてはまる番号一つに○を記入。（○は一つだけ）

1. 健康診査　2. 体操などの教室　3. 講演会　4. 健康相談　5. 総合相談
6. デイケア　7. 会合　8. その他（　　）

問 26－3　問 26－2 で 1. 行くことがあったとこたえた方に質問。**その会場に行くために利用する主な交通手段は何ですか。**あてはまる番号一つに○を記入。（○は一つだけ）

1. 徒歩　2. 自転車　3. 自動車　4. バス　5. 電車　6. タクシー
7. その他（　　）

問 27　問 26－1 で 2. 行かなかったとこたえた方に質問。　**行かなかった理由があれば教えて下さい。**

以下の中からあてはまる番号全てに○を記入。（○はいくつでも）

1. 何が行われているのか知らない　2. 行きたいメニューがない
3. 行きたいが送迎の手段がない　4. 興味・関心がない　5. 時間的余裕がない
6. その他（　　）

問 28　**精神保健福祉センターや身体障害者更生相談所、発達相談支援センターを利用することがありますか。**あてはまる番号一つに○を記入。

（○は一つだけ）＊ここでいう教室とは、行政主催の事業を指し、社協などへ行政から委託して実施しているような事業も含みます。

1. 利用する→問 30－1 へ　2. 利用しない→問 31 へ　3. わからない→問 31 へ

問 29－1　問 28 で 1. 利用するとこたえた方に質問。そこではどんな事業に参加していますか。あてはまる番号一つに○を記入。（○は一つだけ）

1.　研修会・デイケア
2.　その他（　　）

問 29－2　問 28 で 1. 利用するとこたえた方に質問。
その会場に行くために利用する主な交通手段は何ですか。
あてはまる番号一つに○を記入。（○は一つだけ）

1. 徒歩　2. 自転車　3. 自動車　4. バス　5. 電車　6. タクシー
7. その他（　　）

問 30　次に、（自治体や社協などが音頭をとっている）**サロン**を利用することがありますか。
あてはまる番号一つに○記入。（○は一つだけ）
※地域でのお茶会、食事会など、閉じこもり予防を目的として地域で行われている集まりのようなものであれば「サロン」という名称でなくても可。事前に自治体に確認してその名称で質問します。

1. 利用する→問 31－1 へ　　2. 利用しない→問 32 へ　　3. わからない→問 32 へ

問 31－1　問 30 で 1. 利用するとこたえた方に質問。
それは主に何処に行って利用していますか。あてはまる番号一つに○記入。（○は一つだけ）

1. 役所・役場　2. 保健福祉センター　3. 自治会館　4. 公民館　5. 病院
6. 診療所　7. その他（　　）

問 31－2　問 30 で 1. 利用するとこたえた方に質問。
その会場に行くために利用する主な交通手段は何ですか。
あてはまる番号一つに○を記入。（○は一つだけ）

1. 徒歩　2. 自転車　3. 自動車　4. バス　5. 電車　6. タクシー
7. その他（　　）

問 32　保健福祉サービスの中で、あなたの近所で、「もっとこんなものが身近にあったらいいな」と思うサービスはありますか。そのままを記載。

問 33　最近（ここ１年くらいの間、保健サービスや福祉サービスの中で**行政職員と関わり**を持った事がありますか。あてはまる番号一つに○を記入。（○は一つだけ）

1. ある→問 35-1 へ	2. ない→問 36 へ

問 34－1　問 33 で 1. あると答えた方に質問。それは誰とですか。
あてはまる番号一つに○を記入。（○は一つだけ）

1. 保健所の事務職員　2. 保健所の保健師　3. 役所・役場の事務職員
4. 保健センターの保健師　5. 在宅介護支援センターの職員　6. 精神保健福祉センターの職員
7. 身体障害者更生相談所の職員　8. 発達相談支援センターの職員
9. 市町村長や知事　10. その他（　　）

問 34-2　問 33 で 1. あると答えた方に質問。それはどのような関わりでしたか。（自由記載）

問 35　これまでに行政職員から、保健や福祉のサービス、まちづくりのあり方についてこのままでいいかなどと**意見をもとめられたり、尋ねられたこと**はありますか。
あてはまる番号一つに○を記入。（○は一つだけ）

1. ある→問 36 へ	2. ない→質問終了	3. その他（　　）→質問終了

問 36　問 35 で 1. あると答えた方に質問。　それはどのような事柄ですか。そのまま記入。

以上で質問はおしまいです。長時間にわたり、ご協力ありがとうございました。

記入漏れがないか今一度ご確認ください。

☆ 謝品をお渡しして、**名簿にサイン**をもらってください。

問 37　調査終了後、調査員記入

買い物・銀行・病院・人との交流の範囲＝　自宅を中心に**半径**　km

＜自宅と外出先との関係＞メモ

買い物は？
銀行・郵便局は？
通院は？
自主活動は？
保健・福祉サービスは？

最寄り駅は？

あなたの自宅

厚生労働科学研究費補助金（政策科学推進研究事業）
分担研究報告書

視覚障害者の生活圏を捉える試み

分担研究者　　守山　正樹　　福岡大学医学部教授

研究要旨

未だ組織的な検討が行われていない視覚障害者の生活圏に焦点を当てて、それを明らかにする方法を開発すると共に、当事者への聞き取り調査を行った。

通常の調査票を用いた聞き取り調査に代えて、触覚を用いた二次元イメージ展開法（触知TDM法）を、生活に関する聞き取りの方法として採用する方向で検討を進めた。触覚からの調査方法は、前例がないため、同方法の特徴を事前に見極めておく必要がある。そこで晴眼の学生7名（男子5名、女子2名）を対象に、言葉から考え始める場合と、物品の触覚から考え始める場合とで、同一の生活場面／行動がどのように異なって想起されるのかについて検討した。その結果、言葉に比較して、単独の物品の触覚から質問を開始する場合は、その物品の機能に対応して、想起される生活場面・行動が具体的で限定的なものになる傾向が認められた。複数の物品を組み合わせ、マップとして生活を描き出した場合には、“単独の物品による想起の限定性”はあまり問題とならず、むしろ触覚からの具体的な思考を組み合わせることで、生活行動がよりリアルに再確認・再認識されることが明らかになった。

触覚を用いる新たな調査方法の適用に当たっては、3名の視覚障害者（A、B、C氏）を対象とした。面接に当たっては、まず対象者に触知TDM法で生活マップを作成してもらった後、そのマップを触知しながら、思い当たる生活場面・行動を自由に発言してもらった。その結果、通常の聞き取り調査では十分に明らかにされてこなかった“視覚障害者が必要としている人と環境の関連”が示された。A氏（女性、31 歳）の場合は、外出するときの楽しさや、外出先でどのような人々と接することになるのかが、生活圏に大きな影響を与えていることが明らかになった。B氏（女性、45 歳）の場合は、外出を手助けしてくれるヘルパーや、外出先での目的を達成しようとしたときに助けてくれる援助者の存在が、生活圏を規定していることが伺えた。C氏（男性、31 歳）の場合は、普段から情報収集を大切にし、また人付き合いを大切にするライフスタイルを取る一方で、視覚が障害されているストレスをどのように解消し、気分転換をしていくかが、生活圏を規定していると判断された。

本研究では、日常生活で汎用する道具の触覚を入り口とした問いかけにより、生活の細部が想起され語られたが、段差や点字ブロックなど、狭義のバリアフリー環境への言及は少なかった。バリアフリー環境が、視覚障害者の生活圏を規定する重要な要因であることは疑いないが、それ以上に、人が形成する社会環境の方が、生活にとって重要であることが示唆される。

研究協力者
西原　純　　静岡大学情報学部教授

A．はじめに

視覚障害は Orientation と Mobility の障害と言われるように、他の障害、たとえば聴覚障害と比較して、位置的な見当識や移動性において、明らかな不利益が認められる。他の障害に比較して、視覚障害者は移動に際し、「現在、どの場所にいるのか」、「ここから、どちらの方向に、どのように進んだらよいか」など、最も基本的な点での支援を必要とする。適切な支援が得られない場合、時として、閉じこもることにもなる。一方、白杖歩行訓練などを通して、自己の位置を確認しながら歩行できる技術と感覚を身につけたり、周囲からの適切な援助が得られる場合には、公共の交通機関を利用して、自立的に生活できる。このように一人の視覚障害者の生活圏は、健常者に比較して、多様性が大きく、また多くの要因により影響を受ける。生活圏を地理的・空間的な拡がりとして把握したとしても、それだけでは、視覚障害者の生活行動の実際や生活の様子は分からない。また、居住している場所が市街地か否か、公共の建物から一定距離以内にあるか、公共交通機関が存在するかなど、いわゆる行政的な生活圏を規定する要因から、一般的な生活圏が設定できるとしても、視覚障害者の生活にそれを当てはめることは困難である。点字ブロックの設置、歩道と車道の区別、音響信号の整備など、生活の場でのバリアフリー化の程度や、季節／時間帯によって異なる人の流れや環境からの感覚的な手がかりは、ミクロなレベルで視覚障害者の生活圏の細部を規定する。

このように視覚障害者の生活圏と、生活圏に影響を与える要因は、ひとり一人の視覚障害者に個別である。このような視覚障害者の生活行動と生活圏を、どのように把握するかに関しては、いまだ適切な方法が提案されていない。個々の視覚障害者が、自己の生活行動をどのように把握しているのか、についても、十分な知見は存在しない。

そこで本研究ではTDM法（二次元イメージ展開法）を応用して、視覚障害者の生活行動を把握し、生活圏の把握を試みた。

B．対象と方法

1．日常生活を構成する主要な行動を意識できるツール

視覚障害者の生活圏を捉えるためには、視覚障害者の生活と行動を理解する必要がある。通常の健常者を対象とする場合は、生活を構成する主要な行動（買物、仕事、医療、余暇など）を個別に取り上げ、その地理的な範囲を調べ、またそれらを重ね合わせることで、生活圏の概要が捉えられよう。一方、視覚障害者の場合は、行動の出発点となる移動と位置の見当識の確立が必要であり、買物／仕事／受療など、行動の種類によって、単に移動するだけでなく、移動先での行動を円滑に進行させるための支援が必要とされる場合もある。このような事実より、視覚障害者の生活圏を捉える際には、個別の生活行動を分離することなく、それらを全般的に位置づけ、見渡すことのできる方法が適切だと考えられる。そこで、本研究においては、触覚を用いたTDM法を出発点とした。

TDM法（Two Dimensional Mapping Method；2次元イメージ展開法、生活マップ法とも呼ばれる）とは、日常生活の特定の側面（食、行動、運動など）を表わす言葉（ｷｰﾜｰﾄﾞ）について、それらのｷｰﾜｰﾄﾞをラベルに表示し、ラベルを座標軸に従って配列展開し、マップ（展開図）を作成する中で、対象者が生活を振り返る方法である。X軸には“行動の主観的な頻度”（あまり行わない／よく行う）が、Y軸には“行動に関する主観的な価値”（あまり好きではない／大好き、あまり大

切でない／とても大切、等）が用いられることが多い。著者が 1988 年に食事指導に関連して開発した「食のイメージマップ」が元になっている。TDM法におけるラベルの配列と展開の過程を図1に示す。対象者はラベルの操作や出来上がったマップを通して、ラベルに表示されたキーワードの相互関係を把握する。「自分は“キーワードA”よりも“キーワードB”の方を、より頻回に行っている」、「“キーワードA”よりも“キーワードB”の方を、より○○だと感じている」など、様々なキーワードの相互関連がマップ作成過程で把握され、生活の振り返りに至ると考えられる。

上述のTDM法は、日常生活を構成する多様な生活行動を意識させるものであるが、印刷された座標軸やワークシートを使うために、そのままでは視覚障害者が使用することはできない。そこで、生活行動が印刷されたラベルに代えて、その生活行動に用いる日常的物品を使う触知TDM法を採用した。触知TDM法はTDM法の使用経験に基づいて、2005 年に著者が開発した方法で、視覚障害者でも使用できることが確認されている。触知TDM法に用いる座標軸と物品（ミニオブジェ）の配列例を図2に示す。

2. 対象者とマップ作成方法

印刷された言葉や調査票を拠り所とする通常の調査方法ではなく、日常の物品を触知することから入る新たな調査法（以下、触知調査法と記す）を用いるのであれば、触覚から調査することの意味を、事前に検討しておく必要がある。

本研究では、第一段階として、視覚が正常である晴眼者 7 名（学生、男性5名、女性2名）を対象に、言葉から想起する場合と、物品から想起する場合とで、同一の生活場面／行動がどのように異なって想起されるのか、を検討した。7名の学生は同一のテーブルの周囲に着席させた。まず行った“言葉からの想起”では、「外出、買い物、食事、かぜひき・発熱」と単語だけを書いた紙を配布し、言葉を目で確認してもらった後、フォーカスグループインタビューの要領で、言葉に関して思い浮かぶことを、順番に口頭で発言してもらった。続けて行った“物品からの想起”では、触覚からの思考に集中できるようアイマスクを装着した対象者に対し、物品（靴紐、十円玉、プラスチックのスプーン、包装容器入りの錠剤）を順次配布した。同一の物品が全員に行き渡ったところで、その物品に触れて思い浮かぶ生活場面／行動を、順番に口頭で発言してもらった。全物品を手で触れて認識した後、対象者は物品を図1に示す手順で平面上に配列展開し、触知生活マップを作成した。マップ完成後は、全物品の展開形から、生活がどのように認識できるかにつき、発言を求めた。

第二段階として、3名の視覚障害者（女性2名、男性1名）を対象として、触知TDM法を用いて個別に面接した。A氏（女性、31 歳）は網膜色素変性症によって、小学生時より進行性に視力を失い、現在、視力は左右眼ともに手動弁の状態にある。B氏（女性、45 歳）は 33 歳時に失明し、現在に至っている。C氏（男性、31 歳）は 12 歳時に薬剤の事故で失明し、現在に至っている。面接に当たっては、対象者は、触知TDM法の説明を聞き、また座標面や物品に触れて、マップ作成手順を理解した。その後、対象者は 12 個の物品を用い、図1に示す手順で触知生活マップを作成した。マップが完成した後、マップ上に配列された物品を触れてもらいながら、生活場面・行動について、思い浮かぶことを自由に語ってもらった。

3. 記録と分析の方法

対象者全員の同意のもとに、全発言をデジタルレコーダに記録し、文字化した。対象者の発言テキストから、外出や買い物などの移動を伴う

生活行動がどのように組み合わされ、位置づけられているかを探り、視覚障害者の生活圏の多様性を質的に検討した。

C．結果

1．学生（晴眼者）における生活の認識；言葉と触覚を比較して

「言葉（外出）を聞いたとき」と「物品（靴紐）を触れたとき」の二条件下で、“外出”に関連して想起される生活場面・行動を表1に示す。

「言葉（買い物）を聞いたとき」と「物品（十円玉）を触れたとき」の二条件下で、“買い物”に関連して想起される生活場面・行動を表2に示す。

「言葉（食事）を聞いたとき」と「物品（プラスチックのスプーン）を触れたとき」の二条件下で、“食事”に関連して想起される生活場面・行動を表3に示す。

「言葉（かぜひき・発熱）を聞いたとき」と「物品（包装容器入り錠剤）を触れたとき」の二条件下で、“かぜひき・発熱”に関連して想起される生活場面・行動を表4に示す。

表1から表4において、言葉と物品を比較すると、物品の場合は、その物品の機能に対応して、想起される生活場面・行動が具体的で限定的なものになる傾向が認められる。このことは、物品から思い浮かべられた生活場面・行動の特徴を、直接に対象者に質問した結果（表5）からも明らかである。

では、このような具体的で場面限定的な触覚からの物品のイメージを組み合わせ、それらを配列展開して作成した触知生活マップは、生活行動を考える上で、どのような効果があるだろうか。対象者が答えた「触知生活マップから理解できた内容」を表6に示す。マップとして生活を描き出した場合には、“単独の物品による想起の限定性”はあまり問題とならず、むしろ触覚からの具体的な思考を組み合わせることで、既知のはずの自己の生活行動が、よりリアルに再確認・再認識されていることが伺える。

2．視覚障害者への聞き取り；触知生活マップが明らかにした生活行動の相互連関

3名の対象者が語った生活の場と生活行動を、付表1から3に示す。何れの対象者の発言についても、最初の 15 分程度は、座標面や物品を手で触れて理解することに費やされており、付表では省略した。対象者がマップの全容を触知して理解し、その理解に基づいて、生活の細部を語り始めてから後の発言が、付表に示されている。対象者が物品に触れてその位置を確認することは、晴眼者が何かを目で見て判断するのと同程度の重要性を持つため、関連の発言には下線を付した。特にA氏とC氏の発言には、「ちょっと上、下がってくる、高い位置、真ん中に来る、・・」など、物品の位置に関する認識が、生活の把握と直結している発言が多用されており、文中では下線をつけて示した。一方、B氏においては、手や物品の位置への言及は少なく、直接に生活について述べる傾向が認められた。

3者の発言の特徴としては、A氏（女性、31歳）の場合、外出するときの楽しさや、外出先でどのような人々と接することになるのかが、生活圏に大きな影響を与えていることが明らかである。B氏（女性、45 歳）の発言からは、外出を手助けしてくれるヘルパーや、外出先での目的を達成しようとしたときに助けてくれる援助者の存在が、生活圏を規定していることが伺える。C氏（男性、31 歳）の場合は、普段から情報収集を大切にし、また人付き合いを大切にするライフスタイルを取る一方で、視覚が障害されているストレスをどのように解消し、気分転換をしていくかが、生活圏を規定してい様子が明らかである。

D．考察

本研究は、視覚障害者の生活行動と生活圏の把握を目的とし、特に視覚障害者の生活に関する発言を引き出す方法論の開発に焦点を当てた。視覚障害者は調査票を目で見て回答することが困難であるため、これまでの殆どの調査は、インタビューの形で行われている。視覚障害者の生活圏を、個別のインタビューから聞き出すことはもちろん可能であるが、調査票などの視覚的な補助なしにインタビューを行う場合、質問は一つのテーマに集中することが求められ、二つ以上の生活行動を同時に視野に入れたような問いかけは、事実上、不可能になる。そのような調査方法上の制約もあって、生活圏に限らずあらゆる分野の調査において、視覚障害者が調査対象となることは、晴眼者（視覚正常者）に比較して、これまで極めて限定されてきた。 本研究では、複合した生活行動を単純化せず、対象者（視覚障害者）自身が自分の生活を多角的に振り返ることを目的として、触覚を用いるTDM法を、調査方法として採用した。

本事例研究より、視覚障害者の生活場面と生活行動は、“人が形成する環境”によって決定的な影響を受けていることが明らかにされた。“日常生活で汎用する道具”の触覚を入り口とした問いかけによって、生活の細部が想起され、語られた。その一方、段差や点字ブロックなど、狭義のバリアフリー環境への言及は意外に少なかった。バリアフリー環境が、視覚障害者の生活圏を規定する重要な要因であることは疑いないが、それ以上に“人が形成する環境”の方が、生活にとって重要であることが示唆される。

本調査で対象とした視覚障害者は3名と限られている。今後、より多くの視覚障害者を対象に同様の調査を行うことにより、視覚障害者の生活の場と生活行動の詳細が解明されよう。視覚障害者が求めている“人間的な生活環境”は、晴眼者にとっても重要なものである。視覚障害者の生活圏を知ることは、晴眼者が見落としがちな、ミクロな生活圏の重要性に、改めて光を当てることになるだろう。

参考文献

1)守山正樹、松原伸一：食のイメージ・マッピングによる栄養教育場面での思考と対話の支援. 栄養学雑誌 54:47-57、1996.

2)守山正樹：健康教育の人間情報学を目指して－16 名の受講者と過ごした 180 分の授業の中で見えてきたこと－. 石井敏弘編、健康教育大要、284－304、ﾗｲﾌｻｲｴﾝｽｾﾝﾀｰ、横浜、1998.

3)守山正樹、福岡大学医学部公衆衛生学教室グループ： 初めての視覚障害体験、1-71、城島印刷、福岡、2003.

4)守山正樹、実用新案登録第 3117381 号、内省思考支援用具、2005.

E．研究発表

1. 論文発表

なし

2. 学会発表

なし

3.特許の取得及び申請予定

なし

F．知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし

付表１：視覚障害者Ａ氏（女性、31 歳）が語った生活の場と生活行動

私達は道路歩いていても、足に触る触感を意識するっていうか。普段は気にしないじゃないですか。

「よくしてる」ことは食事と・・。「食事」と「お風呂」とかは習慣なので、毎日やることですよね、「買い物」。今、買い物ネットとかあるんですけど、「買い物」と「外出」というのは頻度的に同じようなところにいくんですよね。

「洗濯」はわりとするのが好きなので、この辺くらいですかね。「お風呂」と同じですか。・・・「買い物」は、好きですかね。「外出」は必然的に買い物をすると一緒になるんですけど、「買い物」よりちょっと下がりますかね。・・・

「買い物」と「外出」なんですけど、やはり「買い物」をするとなると、「外出」っていうのは付随してくるものなので。「買い物」は見てるだけでも楽しいのと、「外出」して歩きにくかったりとか、人が多かったりすると、歩きにくい場面があるんですけど、ゆっくり歩くことによって新しい発見、あっ、ここに新しいお店ができたんだなとか、こういうとこにトイレがあったんだなとか　そういう発見をすることがあるので。その発見は楽しいので、高い位置、楽しい位置にきます。

私は多分、何でも、性格だと思うんですけど、「楽しい」ことが多いですね。割と上の、ほとんど一番上のラインにいってることが多いですね。ていうのが、外出とかして、ちょっと歩きにくかったりしてちょっと嫌だなと思っても、その後の「今日は安い服を買った」とか、そういう楽しみの方が大きかったりするし、あとは興味があることが多いので、割と外出、1 人でも自分で歩き回ったりとか、1 人でレストランに入ったりとかもするので、そういった意味で、「食事」も当然、歩き回らない人よりは楽しくなることが多いと思いますね。基本的に何でも楽しんでやる方です。

「外出」するにしても、目的があるから仕方なく外出している人もいれば、心底、その買い物が楽しくて、ネットで買うよりは（まあ、ネットで買った方が便利な時もあれば）、外出して実際に見てとか触って買ったほうがいいっていう場合と、私達の場合「地域のイベントに参加する」っていうのと「外出する」っていうのは違うんですよね。イベントに参加するとなると、勇気がいったり、精神的なものが関わってくるので。あと、その、自分のペースで、そこのイベントとかの場所が動けないってありますよね。他の人と一緒に何かをやるっていうこと、なので視覚障害者の生活を知るという意味でするんだったら、その外出するっていうのを具体的に聞いたほうがいいです。

それから「外出する」っていうのでその理由を二つ。たとえば「買い物」で「自分の趣味」で、「買い物で外出する」場合と、「地域のことで参加する」ってことで、行きました、例えばフォーラムがあったりとか、視覚障害者の器機展示があったりとか、ていうことで理由を二つに分けて聞くか、後は、何か、どれが分かりやすいですかね…人間が、みんな、人がいっぱいいるような、創るとか。

「外出」っていうのは本当にいろいろあるので、自分のために外出するのか、たとえば自分のためのフォーラムがあっても、人が大勢いるところで、あんまり自分のペースで歩けないようなところに行くのかによって、違うので。「買い物」のためだったら、楽しいから行くけど、ほとんど地域のイベントには参加しないって方も

いるんですよね　なので、そこは「外出する」っていうのは、アイテムは一つにするにしても、広がりがあると思うんですよ　生活習慣とか、で考えると。

時間がどれだけとれるかにもよるんですよね。「食事をする」にも、普段家で食事をするっていうのと、友達と外で外食するとかですね、あと、まぁ1人でもレストランとかに行って外出するとかが、食事をするっていうのもあるんで、ほとんど外に出ないっていう人の食事はもしかして、外出と一緒で同じラインで楽しくない位置に下がってくるかもしれないですね。食事をしに行くっていう時に外出も付随してくるじゃないですか　そうなると、人によっては、下がってくる、あまり楽しくないっていうふうに下がってくる・・・。

付表２：視覚障害者Ｂ氏（女性、45歳）が語った生活の場と生活行動

洋服、「お買い物」ねえ…「お買い物」は以前に比べて、今ヘルパーさんが割りと福岡の場合は充実しているから、お買い物はすごく便利になっていますよね。と思います。でもヘルパーさんが、今何て言うか、以前に比べて、ボランティア精神みたいなところがあって、「してあげているんだ」みたいな感じがあるから、ちょっと不便かな

目が見えなくなってからはそうですね。そして、ここに結婚してから、ず～～っと、ここ(福岡)から動かないんで、12,3年動いていません、からね。そしてあの、最近、こう出かけていて思うのは、割とあの、いろんな施設の中でもボランティアの方とかが少しずつ増えてきて、説明して下さるから、そういう面でも便利じゃないですかね。それと、私は美術館、博物館に行くんですけど、一応「ボランティアの人がいますよ」とか書いてあるんですけども、予約して行かなくてはいけないとか、そういうことがあるから、「あっ、今日は天気がいいから行きましょう」なんて思っても、そういうとこが、ちょっと不便さを感じるんですね。

その点、植物園は土曜、日曜、祝祭日は、植物ボランティアの方がいらっしゃるから、あのいろんな方、普通の方でもよく利用したらいいのになぁって思っているんですけど。そいうことを思います。

そして「食事」。「食事」は、割と私が行く時には、食事をする時にウエイトレスの方に一応、大まかなことは聞きますよね。ヘルパーさんと行く時には、ヘルパーさんに教えてもらうんですけど、主人と出かける時には、主人も弱視ですから、そういう時は、もう注文取りにみえた時に、「セット物は何ですか？」とか「ここのお勧めは何ですか？」とか聞いた方が早いから、割と細かく教えて下さるところもありますし、そして、最近の若い方っていうのは、自分のお店でどういう物が出されているのかとか、そこがあんまり分かんない方も結構いらっしゃるのね。

そうそう、でも、意外と、こちらが優しくっていうか、いばって聞かない限りは、教えて下さいますね。細かく。お店によっては、「これがいいですか？」「あれがいいですか？」とか、細かく教えて下さるから、こういうところは、とても最近、いいんじゃないですかね。

そしてこの「スポーツ」、「散策」は、ヘルパーさんが結構、今のヘルパーさんって、あの、歩くのが億劫にならない方が多いですから、自分の体の調子のいい時には、じゃあ今日は歩いて行きましょうとか、ちょっと散歩も兼ねて、うろうろしながら買い物に出かけたり、散歩しながら、っていうのが多いですね。

私は熊本に 18 まで居て、その後集団就職みたいな感じで、東京に行って、東京で 33 くらいまで居て、目が見えなくなって、帰って来て、33 ですから、その後福岡ですね。

やはり、見えなくなって思うには、若い時は都会がいいですけども、ある程度の年齢になると、田舎のほうがいいですよね。生活するには。エネルギーが必要ですよね、都会は。

付表３：視覚障害者Ｃ氏（男性、31 歳）が語った生活の場と生活行動

まずは、多いほうから、一番良く行うというので、「音を聞く」ということです。私の場合は全盲なので、殆ど音の情報を頼りにするということで、情報収集が殆ど、耳からの情報、テレビ、ラジオ、パソコン、人の会話、まあ、趣味で音楽を聞くという意味でも、一番耳をよく使っているということで、一番、最初にしました。

次に、「ペン」「デスクワーク」ですけども、現在今学校に通っているので、日中は殆ど、週、月曜日から金曜日なで、日中は学校に通っているので、これを二番目にもってきました。三番目が、う～ん、（時間あり）「外出」ですね。日々学校に通う以外にも、土日もボランティア活動や、いろんな活動や旅行によく出かけるので、3 番目に「外出」をもってきました。で、4 番目は、「プルトップ」をもってきました。まぁ、よく、飲み会とか飲み事はいろんなところに顔を出している関係もあって割りと、昔に比べれば少ないかなと思いますが、割とあるほうかなということで。

次も、それに近いんですけど、「食事」を次にもってきました。日々の食事もあるんですけど、楽しみで食事で行くと、まぁ、ちょっと、外食でもしようかっていう意味で、まぁ、割と外で、休みの日に友達や、活動している人達と食事をする、まぁ、さっきの飲み会とかと関連もあるんですけど、そういう意味で、そういうイベント的意味で置きました。

次に、「買い物」ですね。「買い物」自体はそこまで、私の場合は必要な物を買うということで、主にパソコンの製品とか、今は勉強に関係する物とか、そういった類で、どうしても必要な時に買うということです。いわゆる、ショッピングという意味では殆ど行かないのでこの位置ですね。

次に「服」なんですけど、服は、服を着ること自体は毎日ですけど、洋服を買いに行くとか、服のコーディネイトとか、おしゃれという意味では、私はあまりそういうことには無頓着なので、あまり全然、あるものを着て、特別にこだわりはないので、この位置ですね。

3 番目は「買い物」ですね。これもほとんど、必要な物しか買わないんだけども、ある程度、自分の好きな物、パソコンの新製品とか、デジタル的な機械とか、興味あるものはいろいろ見てみたいなっていうのがあるので。後、「食事」、コンビニとかでの食事だとか、新しいデザート、弁当とか新製品には興味があるので、こ

れもあまりしないですけど、分かれば楽しいだろうと、ちょっと上にしました。

あと、「食事」と「飲み会」も好きですけど、ちょっと、真ん中くらいかな、ということです。「外出」とか「旅行」っていう意味で大好きなので、「スポーツ」とか、「読書」と同じ位置にしました。一番 Max にしてないのは、気苦労、(?)緊張とか疲れとかいうのがあるので、「スポーツ」とか「読書」と同じ、「スポーツ」もやると楽しいけど、ちょっと疲れたりとか、ケガをしたりっていうこともあるので、Max ではないということです。

今はちょっと、学校に行っているので、「デスクワーク」っていうのが高い位置にきているんですけど、本当はもうちょっと「スポーツ」とか「読書」が頻繁にあって、「デスクワーク」とかが真ん中にくるぐらいの方がバランスのとれた、生活なのかな・

後、もうちょっと「買い物」とかも情報が、なかなか、パソコンを使うことによって、情報が得られるようになったんですけど、カタログ的な情報なので、例えばデパートに行って、リアルタイムに見ながら、例えば友達とそれをやりとりしながら楽しむっていうのがなかなかやっぱり出来ないので、そういう意味でのことがあると、「洋服」だとか、「買い物」とか視覚障害でもかなり、真ん中辺くらいにいくのかなという気はします。今は、そいうのが、よっぽど気の合う友達だとか、周りにいれば多少ここらへんも変わってくるのかなという気がするんですが、私の場合、あまり無頓着だし、そういう友達も、どちらかといえばそういう事に無頓着な人達が多いので、「買い物」いわゆる「ショッピング」とか「服」っていうのは低い位置かなぁって思います。

後、私の場合、他の視覚障害の方と比べて「外出」が高い位置にあるんですよ。視覚障害の中では結果疲れて、家で、インドアで楽しむって言う人も多いから。私の場合は、アウトドアに行くというによって、気分転換がやっぱりするということで、かなり高い位置にあるかなと思います。

図1. 2次元イメージ展開法(TDM法)におけるラベルの配列／展開の手順

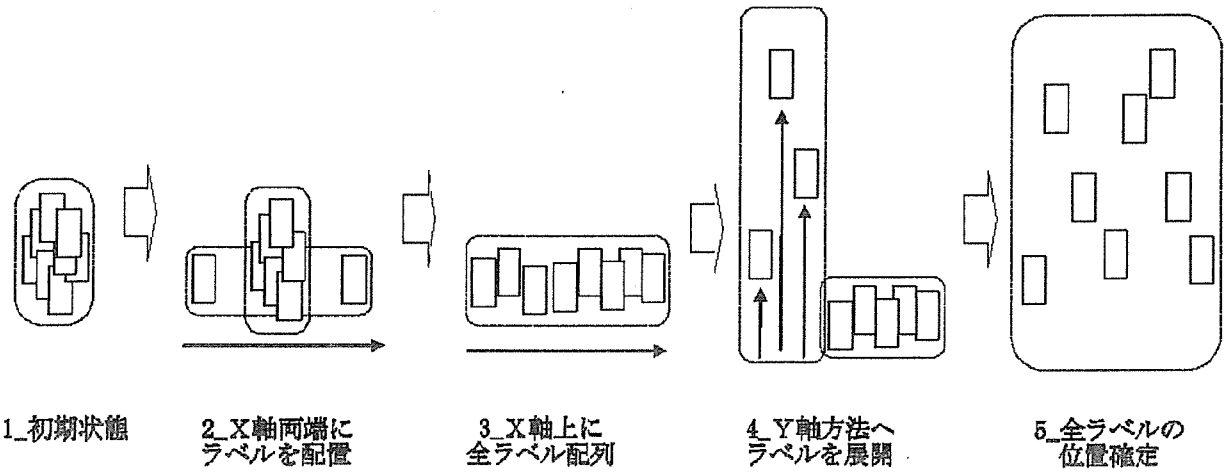

図2. 触知TDM法に用いる座標軸と物品(ミニオブジェ)の配列例

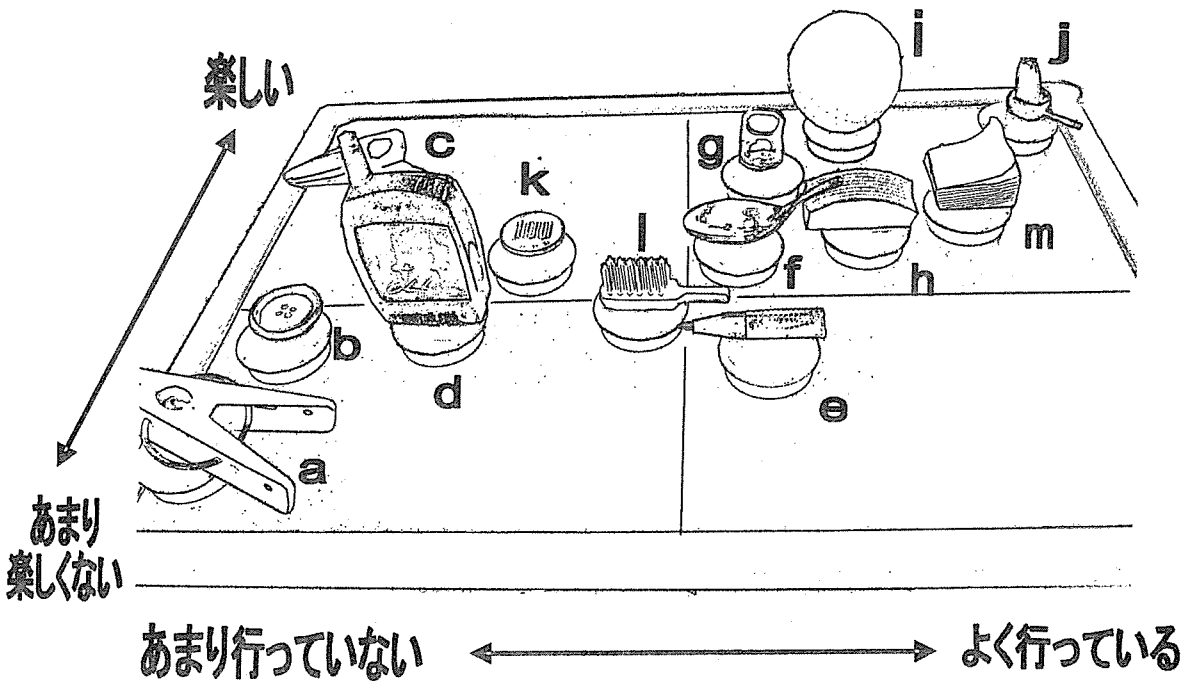

表１．異なる刺激（言葉V.S.物品）と想起される生活行動；　「外出」をめぐって

	言葉「外出」を聞いて	物品「靴紐」を触れて
M1	・自転車で近所を散歩する	
M2	・車でその辺を走る	・買い物に行く。
M3	・車で買い物とかご飯を食べにいく	・靴を履いて、家の外に出る。
M4	・友人の車に迎えに来てもらって出かけることが多い	・学校に行く。
M5	・必ず目的を持って出かける。	・川岸を散歩する。
F1	・学校に行く	・買い物に行く。
F2	・バスか原付で近くを回る	・すごく急いでいるときに、何かをする。

注；Mは男子学生、Fは女子学生の発言を示す。

表２．異なる刺激（言葉V.S.物品）と想起される生活場面・行動；　「買い物」をめぐって

	言葉「買い物」を聞いて	物品「十円玉」を触れて
M1	・安いスーパーに行く	・バスか電車の切符を買う。
M2	・コンビニに行けば、たいていのものが揃っちゃう感じです。	・駄菓子屋。
M3	・僕は逆で、何かのついででではなく、買い物だけをしに行く、という感じです。	・自動販売機。
M4	・僕は結構近場で済ますということを考えて、行っています。主婦の店でも、全部そろえようという。安いよりも近さで。	・コンビニで何かを買う。
M5	・僕は、なるべく安いものを買いに行こうと。	・お菓子を買う。
F1	・私は、その、何かのついでにする、という感じです。学校の帰りのついでに買い物とか。	・公衆電話。
F2	・買い物は、買い物に行くぞ、と思ったときにしか、しません。	・コンビニの駄菓子ゾーンで。

注；Mは男子学生、Fは女子学生の発言を示す。

表３．異なる刺激（言葉V.S.物品）と想起される生活場面・行動；　「食事」をめぐって

	言葉「食事」を聞いて	物品「プラスチックスプーン」を触れて
M1	・自分の家で食べる。白いご飯、味噌汁、おかず。たとえばいためものが多いです。味噌汁も作っています。だしは、メーカー名は忘れましたが、どこかのメーカーのものを。	・カップのアイスクリームを食べる。

M2	・実家で生活しているので、親が作ってくれるありがたいものを食べています。朝はものすごく簡単で和食、昼は学校にいれば学食で。休みの日とかは朝と昼がいっしょにしたり。	・喫茶店やファミレスでのコーヒー
M3	・友だちと外食するというイメージです。場所はいろいろ。焼肉が多いです。朝と昼がいっしょのパターンが多い。	・ゼリーとか全般的に買って食べる
M4	・食事は孤独を感じます。（彼女と分かれたばかり）一人暮らしなので、一人で食べることが多い。しじみ塚で。もくもくと食べて直ぐに帰ります。バイクで行って、すぐ帰ります。	・プリン
M5	・僕も自宅生なので、母が作ってくれて、家族で食べるので。暖かい、楽しい気がします。	・ぷっちんプリン
F1	・私も自宅生なので、作ってもらえてらくちんだなと。朝はとても早いですがパン焼くだけなので。	・ゼリーとかヨーグルト
F2	・食事は祖母が作ってそれを食べています。暇なときと休みは私が気が付いたら交代して。だいたいは、作れると思い込んでいます。酢豚はあまりつくらないが、マーボ豆腐は。元だけだと足りないので。	・冷蔵庫の中にある野菜

表４．異なる刺激（言葉V.S.物品）と想起される生活場面・行動；
「かぜひき・発熱」をめぐって

	言葉「かぜひき・発熱」を聞いて	物品「包装容器入り錠剤」を触れて
M1	・近所の小さい医者、医院に行きます。	・頭痛がする
M2	・病院に行くんですけど、市に１っこあるような大きなところに行きます。	・苦しい
M3	・７度５分なら、ちょっと前から風邪薬を飲みます。	・飲んだら吐く
M4	・姉に電話して、どうするか決めます。	・ずっと寝ておかなければならない
M5	・寝るの一手です。次の朝に７度５分を超えるようなら、かかりつけの医師がいろいろあるので、そこに入って薬をもらいます。	・調子が悪い
F1	・７度５分なら、クリニックに行きます。	・水をたくさん用意する
F2	・病院には行きません。家にある市販の薬を飲んで、どうにかします。次の日の朝、上がってなければ、学校に行きます。	・胃薬

表５．物品から思い浮かべられた生活場面・行動の特徴

M1	・具体的なイメージや映像がぱっと浮かんだ。
M2	・外出というと車を使ったり自分が好きなことをイメージする。靴紐だと、歩かなければいけないなどと感じる。
M3	・置いてある物に囚われてしまう。スプーンから。
M4	・物自体が限定されているので、それに関するイメージが思い浮かぶ。十円だけ。
M5	・それぞれの物に関連して考えるので、具体的になる。一方、広がりがもてない。
F1	・物を触ると創造したときの範囲が狭くなる。考え方が狭まったかなと思う。
F2	・文字だけのときは、外出するときの手段だけ思い浮かべた。

表６．触知生活マップから生活場面・行動を思い浮かべて理解できたこと

M1	・新しく何かが分かったわけではない。確認だった。
M2	・だいたいこの八つがあれば、生活の主なところは網羅している。
M3	・この八つが自分の生活を良く表していると思った。トータルとしては、よく生活が現れていると思う。
M4	・自分の生活がこういう感じで行われていることがわかった。自分は音楽をよく聴いていると思ったが、・・・。
M5	・よくすることとしないことの間に断絶があることが分かった。こう並べることでしっかりわかる。
F1	・私も再確認だと思う。楽しい、楽しくない、をこれほどはっきり考えたことがない。
F2	・順序づけを普段の生活ではすることが絶対にないので。嫌いでも毎日やらなければならないことがこれほどあるとは思わなかった。

厚生労働科学研究費補助金（政策科学推進研究事業）
分担研究報告書

過疎地域で生活する人々の日常生活圏域と保健福祉サービス
ー高齢者と乳幼児を持つ母親との比較ー

分担研究者　山田　和子　和歌山県立医科大学保健看護学部　教授
米澤　洋美　国立保健医療科学院　研究員

研究要旨
過疎地の小規模町村は、今後一層合併が進行していくことが予測される。本調査は少子高齢化が進む過疎地で、サービスを受ける対象者である高齢者、乳幼児を持つ母親とサービス提供者である保健師に聞き取り調査を行った。
高齢者の日常生活圏域を規定する要因を基に母親の場合の日常生活圏域の規定する要因は、高齢者と同様な要因は【永住志向性】【居住年数や地域への愛着】【地区組織の圏域】【人口規模】【交通手段】で、異なる要因は【健康度】【居住年数や地域への愛着】【永住志向性】【高齢化率】であった。高齢者の【健康度】は母親の【活動性】、高齢者の【居住年数や地域への愛着】は母親の【実家とのつながり】、【高齢化率】は【出生率】に対応すると考えられる。
さらに、過疎地においては、高齢者の人数、母親の人数をふまえ、サービス提供のキーワードである「交流」が図れる範囲を考えると、高齢者は狭い身近な地域、母親は合併した町全域の広い地域であり、対象者によりサービス提供の範囲を考える必要が示された。

研究協力者
前馬　理恵　和歌山県立医科大学保健看護学部　講師
弓庭　喜美子　かつらぎ町役場花園支所　保健師

A. 研究目的

日常生活圏域は障害児（者）、高齢者、壮年期、児童・学生、乳幼児を持つ母親など各々特徴があると思われる。本研究においては、増加する高齢者と減少する子どもという2つの側面を持つ過疎地で、高齢者と母親の両面から調査を行い、日常生活圏域の現状を把握し、日常生活圏域を規定する要因を明らかにすることを目的に調査を行った。

B. 地域の概況（旧H村）

平成12年国勢調査では人口614人で、年齢別では「0～14歳」73人（11.9％）、「15～64歳」312人（50.8％）、「65歳以上」229人（37.3％）であった。平成15年には人口573人、平成13年には出生数3人と年々少子高齢化が進展している。

旧H村は山間部に位置し、集落と集落

は離れ、徒歩、自転車での集落間の移動は困難である。

旧 H 村は、1150 年前弘法大師の高野山開創とともに拓かれ、寺領として保護を受けてきた。この頃は村内に 100 近い寺庵が結ばれ、学僧たちが思考を深める修行の場とし、重要な位置をしめていた。明治 22 年市町村制の公布によって旧 H 村が誕生し、昭和 28 年には大水害による全村壊滅的な大打撃を受けたが、村民一体となった災害の復旧と財政の再建を成し遂げた。平成 17 年 10 月 1 日に K 町と合併し、旧 H 村には支所が設置され、身近な住民サービスが提供されている[1)]。

旧 H 村内には医療機関、特別養護老人ホーム、保育所は無く、ディサービスは週 3 回、K 町社会福祉協議会が実施している。

C. 研究方法（その1）

1．調査対象

対象は 65 歳以上の高齢者（以下、「高齢者」とする）18 人と 0 ～ 3 歳までの乳幼児を育児している母親（以下、「母親」とする）3 人とする。

2．調査方法

構成式の質問紙を用いた聞き取り調査で、対象の選定は旧 H 村の保健師に依頼した。

3．調査期間

高齢者は平成 18 年 3 月、母親は平成 19 年 2 月

4．調査内容

対象者の属性として年齢、性別、家族構成、居住年数。

高齢者、母親に共通する調査項目は、身近な地域の範囲、地域に対する愛着の程度、参加している地縁組織、買い物場所、市町村合併により生じたと思われる変化（13 項目）で、高齢者だけの調査項目は、日常生活自立度、地域に対する愛着の理由、地域の人との暮らしで大事にしていることである。

5．倫理的配慮

調査の依頼にあたり、対象者には本研究の目的や参加は対象者の自由意思であること、また、結果の公表においては個人が特定されないことについて記載した文章を用いて調査者が説明した。説明に対する同意を得た上で、聞き取り調査を実施した。

D. 研究方法（その2）

1．調査対象

旧 H 村を長年担当し、現在も担当している保健師。

2．調査方法

サービス提供者からみた、「高齢者」と「母親」の日常生活圏域とサービス提供のあり方について聞き取り調査を行った。

3．調査期間

平成 19 年 3 月

4．倫理的配慮

対象者には本研究の意義や目的について調査者が説明し、同意を得た上で聞き取りを実施した。

E. 結果

1．調査対象者の属性

高齢者の性別は男性 5 人、女性 13 人で、年齢は 68 歳から 89 歳の間に分布し、60 代 2 人、70 代 10 人、80 代 6 人であった。家族構成は「単身」5 人、「高齢者世帯」13 人であった。日常生活自立度は「自立」7 人、「J 1」3 人、「J 2」7 人、「A1」1 人で、日常生活が自立している人が多かった。

母親の年齢は 20 代 1 人、30 代 2 人で、家族構成は 3 人とも「核家族」で、仕事をしていなかった。

2．居住年数

高齢者は全員「30 年以上」で、その内